Book Review 15-13 時代小説　# 雪渡の黒つぐみ

『# 雪渡の黒つぐみ』（櫻井真城著）を読んでみた。著者は岩手県北上市生まれ。本書で第18回小説現代長編新人賞を受賞しデビュー。

江戸時代の寛永二年（1625年）。陸奥では過激な新興宗教・大眼宗が台頭して、南部藩と伊達藩とが領地争いが燻っていた。そこにキリスト教迫害が絡む。南部藩の若き忍者Kは、隣国・伊達藩の動向を探る命を受ける。横手城を炎上させた謎の新興宗教・大眼宗教祖とは誰だったのか。その途中に女忍者や遊女として売られてきた娘と出会う。Kは手裏剣も弓も使わないが、どんな声も完璧に真似できる“声色使い”が特異な能力である。最後、キリスト教、新興宗教、伊達成宗、幕府が絡む巨大な陰謀が明らかになってゆく。冬の陸奥地方で物語は展開してゆく。“声色使い”の忍者がユニーク。ただし陸奥における以下の作品群に比べるとスケールが今一つか。

伊達藩を扱った小説では、山本周五郎の歴史小説『樅ノ木は残った』が有名である。江戸時代前期に伊達藩で起こったお家騒動「伊達騒動」を題材にしている。 歌舞伎の『伽羅先代萩（めいぼくせんだいはぎ）』で悪人とされてきた原田甲斐を主人公とし、江戸幕府による取り潰しから藩を守るために尽力した忠臣として描き、新しい解釈を加えた。

陸奥を舞台にした歴史小説と言えば、高橋克彦氏の陸奥３部作が圧巻ある。『阿弓流為（アテルイ）』は、陸奥の英雄の生涯を描いている。8世紀、平和に暮らしていた陸奥の民に、黄金を求めて朝廷の大軍が襲い掛かる。それに対抗するためやむなく立ち上がったのが蝦夷の若きリーダー・阿弓流為である。ページを捲る手が止まらない大迫力。

『炎立つ』は、平将門の乱が平定されて100年経つ陸奥。陸奥の蝦夷(えみし)を朝廷は見下すばかりである。陸奥の豪族安倍頼良と息子貞任が、源平の武士たちの台頭を前に陸奥に黄金の楽土を築こう立ち上がる。

『火怨』は、織田信長や豊臣秀吉の天下布武に対抗して、陸奥の戦の天才九戸政実（「北の鬼」）が反旗を翻す。強い者に負けを承知で戦う姿勢に胸を打たれる。

藤沢周平の海坂藩シリーズも外せない。海坂藩と断定できる（文中の地名や店名等）作品を集めた文庫本が出版されている。海坂藩（架空）は荘内藩をモデルにしたと言われている。用心棒シリーズや隠れ剣シリーズは剣を交えて対決場面の描写も素晴らしいが、根底に人間愛が溢れている。